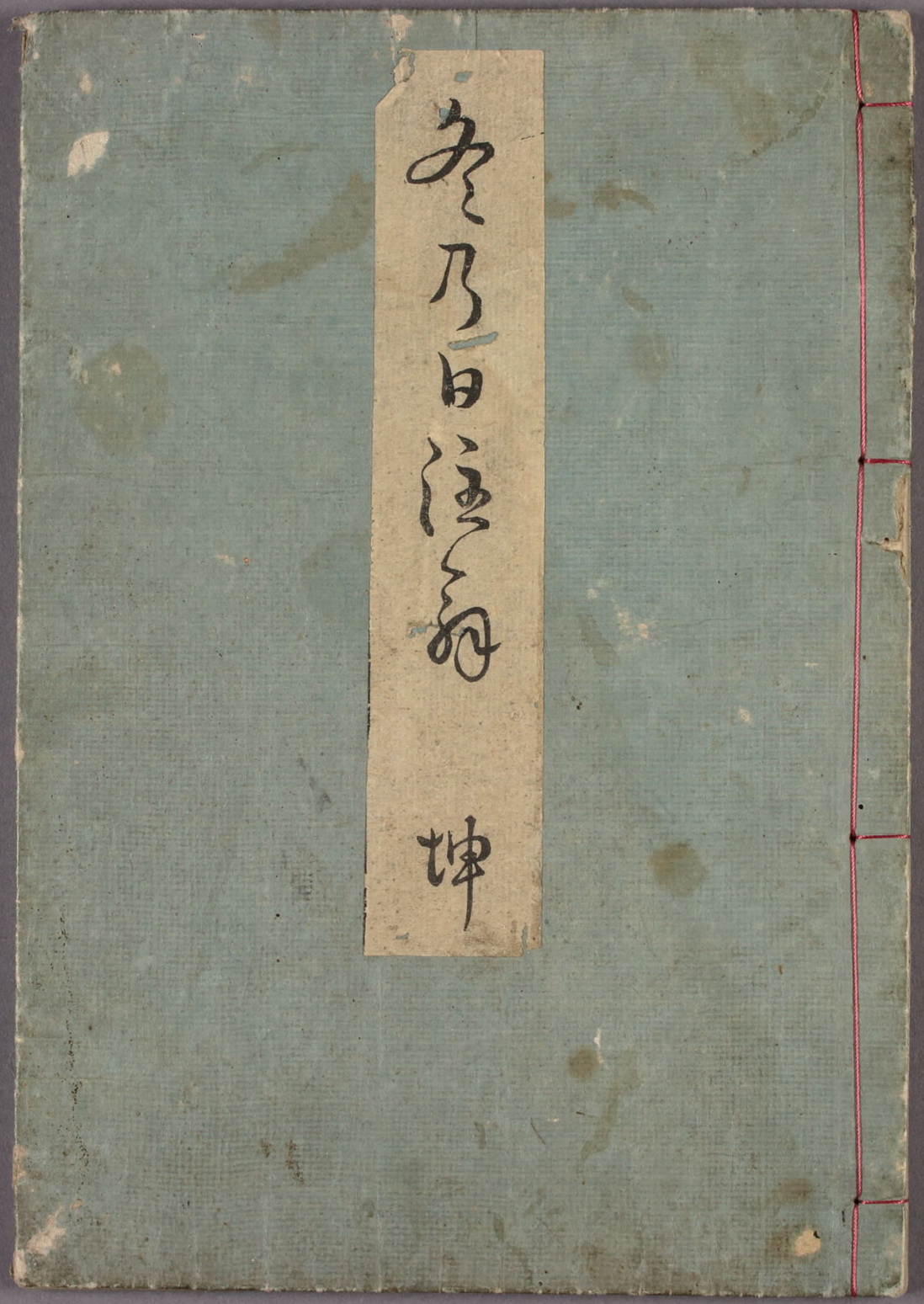
冬乃日注記
坤

冬の日注解坤

浪花　黄華庵升六著

[illegible]

あり少彼津の[illegible]火焼家を
すゝきを[illegible]

岩代雲のをのうつまの[illegible]　重五

万葉集三雑歌人芦火焼家者酢四鮒方已我妻古乎常
弥記　人麿　此歌を初書として岩ぐうに対して句と
芦火[illegible]家に[illegible]
つゝ[illegible]
[illegible]

[illegible]ぬるつきつまるもの　武蔵の国の歌

めやすしぬと思ひて侍りし　古今集三夏の

歌乃やどりにかはれる　梅の花いろにそまれるかを

要之　けうもはなやかにやうにかはれるとて侍りし

やはらかにて不思議なる歌の様やはら

様なるもあるべきなり　或人の

解に芦火たく家の煙の妻の煙もやはらと

こめてなびくも岸うつの妻を思ふ人白くかすみし

とうたへるしるべきなり　芭蕉翁の句に

鶯一声なくや　其角の句に　此角おもふ

に菊なくなる岸うつの波しらるるものを淺しめぬるか

一首の美哉を見侍るべし　岸うつの妻恋思ふ

[illegible]

[illegible]の味も見侍るべく歌の

詠歌も自ら生ずべきなり　今ぬるとは白の業にて

しき岸うつなるもつまいとうつくしく人をもぬ楽

きなるんとなるべし　俗語なり　なるべし

いとおかしくて

ひとの移ひを　詠　磨寒　荷兮

[illegible]職人をしを越前に

白うこの数日乃岸うつもの業にて

思ふ人加へ磨も又汝の移ひの乃うつ紀業を

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

蕪蘭馬骨の雪ふり咲るるを　杜國

此第三こゝに手書をたゞしくゝ玄妙こゝ初んの作りこゝ
きゝふるゝ〳〵先初の五文字ふ花筏こゝ夏季のもの
を性こゝすゝこゝ夫故此句ふ白を過てこゝる骨の
雪こゝ曲句をこゝふ実ふ百白の中ふ白こゝ
平白ふ小こゝふへこゝ此第三の位こゝ俗句こゝ
こゝ取こゝる骨の雪こゝ作りこゝる此句の手書こゝ
こゝに筏のこゝくゝこゝ取ふ名こゝ九のこゝの遠く学未悉く
句ふ〳〵ハこゝ骨を取〳〵こゝこゝる骨の雪こゝ
こゝきこゝる作りこゝ〳〵こゝのすきこゝ取ふ咲こゝ

をこゝこゝ取こゝる手書を此ふ師こゝき幻術こゝ〳〵こゝを文
字遣の第三こゝ句ふ化つふ句ふ我
故字遣の第三こゝ文字遣のこゝ化つふ句ふ我
こゝふ山こゝ此こゝ句ふ杜こゝの五字こゝ取こゝ
居ふ山こゝ句こゝ作こゝ杜こゝの五字こゝ名の初を坐ふ
作こゝ句こゝ句こゝ字こゝ遣こゝ句こゝ字こゝ句こゝ字こゝ句こゝ字こゝ句こゝ
字の此句こゝ杜こゝ句こゝ句こゝ句こゝ句こゝ句こゝ句こゝ句こゝ句こゝ句こゝ
此句こゝ句こゝ句こゝ句こゝ句こゝ句こゝ句こゝ句こゝ句こゝ句こゝ句こゝ
文式の句こゝ句こゝ句こゝ句こゝ句こゝ句こゝ句こゝ句こゝ句こゝ句こゝ句こゝ
こゝこゝこゝこゝ字遣の手書こゝ句こゝ句こゝ句こゝ句こゝ句こゝ句こゝ句こゝ
句こゝ此才三をきこゝすこゝ句こゝ句こゝ句こゝ句こゝ句こゝ句こゝ句こゝ句こゝ

詩經七月在野八月在宇九月在戸十月入我壮下美

[illegible]蟋蟀も時ふまさに定[illegible]ん初秋の長句
[illegible]を悼とする付隣陣の次よりして次[illegible]も
に中一[illegible]きの中へ才三位と正句ふまさる所今
[illegible]付味いをしらぬくと定[illegible]る所今て後の義を
すくしくて サ五ケ隙日才三の変りよ文字の定[illegible]は
一句の[illegible]長句のやうなれども下の[illegible]ぬ所少て次乃
句へ乃[illegible]きなし付記を[illegible]る付いよの字てのまも[illegible]
[illegible]付[illegible]付句い才三のやうくと百句の中よ
[illegible]も撰出る程所才三乃格を[illegible]れハやうく定り[illegible]
留[illegible]へ　才三ハ平句と[illegible]て曲節のうちいれ
[illegible]も一作[illegible]ハ平句の[illegible]曲節[illegible]中へ
後の定[illegible]付ハ亦長句と才三の[illegible]手亦[illegible]定

[illegible]付

[illegible]を田[illegible]里[illegible]　宗因
[illegible]山の[illegible]　仙順
付[illegible]等植[illegible]　芭蕉

[illegible]才三長句[illegible]少[illegible]才三[illegible]
[illegible]作る付ハ才三[illegible]の論[illegible]付ハ[illegible]
の[illegible]一曲[illegible]才三の位付[illegible]
平句[illegible]付[illegible]
続麿の付[illegible]の場[illegible]
[illegible]花と白[illegible]
[illegible]女乃浦[illegible]才一[illegible]
付[illegible]

又作りて組ものうつり物も云まれ実に功者の仕業
なるべし

踏入る山の月にすゝきあり　野水

是季うつりにして前後を忘さるゝの生頓とも見へなし
からとふらく前句の景の霧と云淋しき体を仙境
ともみなして踏入るとハ作りたるなり林和靖の体
をほのめかせたるなるべし

風吹ぬ秋の日瓶に酒なき日　芭蕉

此句の心ハ踏入るといふ静かなる体にうつりたれ
ども寂寞たる容を附たり然ども前句の白ひに瓶
に酒なきとハ作りたる月とふみ秋の日と附たるハ日並
の多かりしてさ餘所とするなく初んの感ひもなかるらんには

と丁寧にあるし附る句意ハ風流したり秋の物の詠も
秋のいとおかしけれバ瓶子酒なくおかしけれバ体静
かなるにみるべし云ふに人の説ハ謂されども踏のなかりけるに
百姓の老翁ともその説をなりしと見えたる作者の手
柄なるべし

萩織る笠を市に振まふ風　羽笠

前句酒なきと云より物の外のさまをおもひよせて彼茶
好の酒飯望の田舎に遊職して世をするよふかおらしるゝ
故そ茶をとりも世合せて笠を作りてすゝきともひとし夫を
賣ると附たり萩織ハ萩の花笠を市に売らんとハ
市町に賑はりくさ身を指しふるまふと云なるべし
萩ハ菊季を持たせたる也しで附句ハ趣向を専一とし

て季に付て物の名つけ侍る事の始なり初めて
しておりうれたるも当季より来る白もあり其
ゆえ来るも一概に云ふ猿蓑集に白ふうの
ふうてうの月を八月に向よりあるを同集に
まて天に有る月の名有けれ共当季より来る白
当季より来る白い白り文をもちひ風情を記
し侍りしに風情とハ白に振りを付るを俳
白に振りを付るとハ去来抄に物ごとに小粉を降と立さ九ゝ月を白
ゆるを省去あるを少粉を降と立さ九ゝ月を白
振りを付るを風物に文をのをとをいくひも味をし
論語　子曰言以達志文以達言不言誰知其志言斯
無文遠不行矣されば文をまとゝ云ふ事ハ再ひも述べる

ものゝ

賀茂川や胡麿千代祭り徽を　荷兮

若白髪を市に振て粥にかゝるとて附
ゆるよ祭りとゝ云ふ事ハ
の中に多つゝしくおりたるものを拾ひ出して胡麿
千代ゝ云ふ俗説ゝ多祭近ト作り
ゆるして壹ゝ作ゝ　此祭い上加茂の川
上に稲荷の祠あり此神の好物セロとて生ゝ作ゝ
ゝ胡麿を植ゝに一本も植ゝるゝゝ故に此祭
を胡麿千代祭ゝ云ひ侍ゝ又ゝ世の社ゝ
七夕祭に出ゝ

いたゝくの賀年ゝ作り　重五

此付ゑおもしろし前に縁の事なしとしては例の千眼一統
にて本りしかに次にかくき縁の事ねことの好しく
付るとこそ古へは前にまへ付て来にしに縁或は嫁足か
一門我もくとるひあるて旅りしきに家系乃縁ハ於
ゆへに来ぬてこそ縁あるりしきとこさうふて其他の旅ハ
しれハひとさまれさまあるを申て姑のんつりひさもなる尼
しとなひやうりと出ゑくるハか茂川の尉なりるへし

名ふりて布橋にかはりゆく　野水

名は少ハ縁あるりしきてこそうりとて付出してあれりと
いふまでふとうみていてくるトリなりわかるれていふやる
をし白き娘の情に執ありていひ字ハかりもさる縁を
以名のとふしていさつしてまる事しうれとし月を打うると

二三
平繋

たへ人にも語らいりてこゝれ居るゑの娘のんそ子足かるを布橋と
云ふ下に諷りてさ多少女まての名へき仕て出くるよりも
まるひるりわるねと付さるん諷りゆきしといふへきと笑りゆて
と作りなるて文章なるへし

うきハはたちを越る三平　杜國

笑りゆてと云ふり愚女とよひ出まへし白ぎハおのれり
すりて醜きまゝに袖濡ひくへきとのうふなるていてもはく
取をこうちこちなりとうかくと二十をも越るめるさま
いとなりけれゝ三平も三十二満として乙清前の事とよ

捨られぬる鷺の離を悲　羽笠

あまり人情つきうたる處ハ伸し白き付のことハはたちをまゆる
愚女の住し　きみ池のかうるを道遠して鷺のおもかしきを

うらやましおもはしくも脱すれば雲雀にも劣るのあがる哉
なく我身のうへにおもひ合せてうら寂くなるべし 万葉集に
瓶尻の入江巡れる鴨すらに玉藻のうへにひとりねなくに 元
鴨すらもたくて我身のうへをおもふなるべし

火をたけば燈をもたぬ人をあはれむ 芭蕉

是は四季の附にして泥の凍りに徳容なき小家作りて
うち侘居せるなる老の住まるべし火をたけば巨燵とかふに幾多
志は嗟ひなきさ我あんせるよされば冬も春さき巨燵にさ夜のお
らしを凌ぐさりみて眠るもやるかたなくとして旅人を幾
居る老の身の佗しさを余情白おに聞こゆるものなるべし

門前の翁は氏神まうりて帰るかな 重五

此人をまうんといふを尋ねて附るさけれ歌にも打丸主も
打丸主は子なし人を失ひて今は縁に己が身ひとつの置所なく
なりていさゝかの由縁を求めて番人の門前にいさゝか侘居
侘しく旅しれぬなりし世の若しの業子たもあはれなる句也火
なね巨燵とかふ子供ら其の身に添ねかへをとるなるべし

血刀のかくれ月の曉しさ 荷兮

命を借りて帰るといふは性子落人をとらへなれば千騎一統の要
なれども平の落人を捜して門番とは武家なるをとりひかへて血刀
かくれと作りたる是も趣ある句もとは家中の若きもの或は
徒士なるの類ひ口論打して互に合手を打果して其れ
居るさまをとおる門番のその人をあんじめてるとなるべし

雲下りく本郷の鐘七つきく 杜國

若衆を武家のさ執斬りくとみえたれば江戸人と附てそれ

う中ゆもかついとさて武家の多くて古も人集の荒
きゆまゝあれに平場をゝん空てうゝ白ゝい周うち桐し
うゝ生時ゆちうゝ　旁下りて五月のゝうきゆゝトいうゝ
アゆりて陸七つきくハ血刀原すゆけゝこの乱ゝうん

冬ゝうん納至ゝてくゝうゝ　野水

立ゝゝ釈の件ゆりて吹ゝうゝの気色ゝ丈を冬ゝいひ納至ゝと
作りて秋季ゝ待ゝ絶ゝゆ待の一字よ持ゝうゝおゝてゝうゝしゝゝう
当季ゝうゝ葉ゝゝうゝ白ゝれに白ゆ振りを附ゝう故人の白作
を味ゝくゝ

花ゆ注く桐の徽ゝすゝにゝ原　芭蕉

立ハ芸白の納至ゝてくゝ生人の位を定めて附ゝうゝ桐の徽
ゝ接ゝゝうゝトゝ生ゝの白ゆりて夏季ゝうゝまれゝうゝ叔叶白

ゝ生ゝうゝくゝ解ゝゝ生桐の徽ゝゝゝすわゝゝゝゝ徽の字
韻會曰徽支韻敗切徽也（ウルムカヒクロシ）ゝゝゝ　説文物中久雨
而青黒也ゝゝゝハ叶徽ハ衣の徽ゝ敗切ゝゝれハ衣乃ゆ
ゝ貌也ゝゝゝくゝ生ゝゝゝ生ゝゝゝ解ゝゝんゝゝゝゝ次の白
の徽ゝものいゝ数冬をのゝゝトゝゆゝ白ゝゝ思ゝゝ合ゝゝゝ
月ゆゝゝよ抱ゝゝゝゝゝいゝ生刈　五欲六塵の境をゝゝゝ
ゝゝゝゝのゝゝゝゝゆゝ業障の嫌ゝゝくゝゝゝと怪ゝゝゝ生者乃
の塵欲を捨ゝ生乃のゝゝゆゝんゝゝの言ゝゝやゝゝん　百切の言
花ゝんゝゝれゝゝ人乃ゝゝゝのゝゝゝ桐の処ゝゝゝゝゝゝ
ゝれハ苦ゝ言ゆ著ゝゝゝ蛇ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ人ゝゝゝれハ生言
注ゝい梅迎のゝゝゝれハ利のゝゝゆゆ深ゝゝる俗彼宮袴の
垢をゝゝゝゝゝゝ桐の徽ゝ接ゆゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

或人の一説に黴とハ納豆のごとくなるべし然れども亦蒙求に
淮南子曰墨子見練絲而泣之為其可以黄可以黒矣
墨子が練絲を泣くところハ所謂白き絲の黄にも墨にも染るがごとく
今もまた桜の麗色に黴するんの垢を指して桜の黴とハ
申されけらん

僧こゝろのいたれ飲多哉呑　羽笠

是ハ茶句に桜黴を按するといふをも味ふて見れハ花に泣
ハ狂業僧の咲にし桜の黴を按するとハ愚かなるを弃てゝ家にかへ
入る人なるべしとまで僧とハ仏なるものいたれとハきこえたの
行にして山吹を口きゝの孫語なるべし　古今俳諧乃部に
山吹の花色衣ぬしやたれ問へどこたへずくちなしにして
款冬を呑ムと作りたるハ山吹の露を或ハ下戸なるべし

或人の解に山吹といへるハ茶銘といへんに作を
のむといふに子細なけれども季をとられけれども花来なるらん
呑ムといふにつきて是食数の雅ありきん寺銭に納まるべく
ともいへど　伝へて曰句の表に山吹を呑ムといふなれハ山吹を
食数にたとへ寸尤山吹の下ゆくなかれの水をや飲といへるの
句なるべしといへども句乃表をまて論する時ハやすらかなれ
ハ食数ハ遁るべし去りながら蕉門ちんの俳諧なれバ
食類なる時ハ是非を継ぎとかねかれてなやたるし　又ある
一説に律制に湯水茶の類も食数子　立されハ是疑なし
ともに解もいかなるも律の法をとりて俳諧の指合を採もいへ
なれバたとへ律儀に湯水の類食数なりといふても
俳諧にハ飲食なりとて二句去まれハ然るべきを疑ふと

依しかるやらん今予か解のごとくならハ山吹の花を
呑といふ句となるへし露ハ飲食の数ならされハ是非なき
へし只あらハ見る人々の言葉に任せて置へきこと

白燕濁らぬ水に羽を洗ひ　荷兮

是ハ前句の数々を呑といへる辺を附出したり　扨白燕
の事前句の山吹に取りて白ひ色を合せたるなり和
名し今試に解すれハ予か窺見の一つあれハ埃嚢抄曰求法高
僧傳云鷲峯山ニ春半黄花ヲ開ク艸アリ大サ手ノ指許
有其子同ク黄也曰春女花山吹ニ相當ル歟とあり是を
証に見れハ前句の僧飲食を呑といふ一句乃さま作とならく
先僧の体にみへ下ハ付けるにハ求法高僧傳にいへる鷲峯山
の山吹と見立てなし異国の体を見ひらきたる由縁

釵（カンザシ サイ）

をかしく小燕とハ作りなくし前ハ山吹に対して黄白の色立
あらんとも濁らぬ水とハ無言の僧乃清くある行法のうつり有
るへし

宜旨かしこまる釵を鏤め　重五

此句ハ燕の一名故天女ともいひ亦白燕をみれハ貴女生すると
いふ故なりもあれハ小燕ともいひ貴女をも思ひよせて一生貴女
ようして釵を鏤よとあり宣旨の下りしに附たるへし
さりは本草ニ時珍曰人見ニ白燕ヲ主ル生ニ貴女ヲ故ニ燕ヲ名ク天女ト
笑　亦の一説すれハ燕ハ和歌に見えさゝなれハ中華の事とも
みゆる唐の玄宗皇帝の宣旨に楊貴妃の釵を鏤よとなしと云
一説なり亦或人の解にハ燕ハ釵の挿梢にして是ハ寄たるもの
釵といふ一説もあれとも是ハ取かたくあらんとかりんなし　扨此る

宣方かこくとして下ふ義堂のたくさんのををてんおり
くにたるとらを和叙を重ね虚を作るる例のものはとりつくし

八十年をこの門人なる意を母ととして　野水

此白先八十年を三つ人なるとは三百四十年ふるるを三百四十
才寿ふ母たりとなくてふ系むつくしく解しうてさるすくまるかる
をふ法ふの説區にあり一説ふ曰上三の八字挽年の誤りこ八の
字を除くこれ九十年を三つ人なる ふ して三十の男こととふ解を
すれども各のり北大なれ為の校合の本多九いうよさせこお違
のたくさんや八の一字を除くしとん稀まるる解たるくし
亦一説曰是ふ三十年ふの人をたるすふして八十年い祈くこる
くし　八宣葉　八宣垣　八十氏の類ととして人九の字をの
まくふの八十氏門の細代本ういるふ月のたくさんす

ふ九八十八年を数の年るこ八十年を三つ人なるわるふ只長寿
の人ことのこたくしとたるつ一説曰八十年を三つ人な
い七十三の男こさるふ七十を三つ人なるこ七十一ふ九八十のうちふよ
一つ人なるこ七十三ふ九八十の数のうちは三年人なるこ
を八十年　ふ三つ人なるとたるを八十年を三つ人なるこ
おくしくものの好ふ作りこのくさんを所の見捕くたるり
をこの三説ふ九九れ好むふ作って取べきこ子い弟
三の説ふ為接年くし　白解芳白叙を続ったる宣方ふ
しを半妃ふ九西施ふもあるこ九半女の叙こ丈を続
きたるに寿い系宣の弟一こ九いきこし　生ふ九のこれ
生寿を数いきたるこ九こ九中ふもる半の人いわこ
生生を数ふ法性こ九八十年をこ人なる生活乃きいまこ

世も捨りとなれば生を命孫の系を孫又不目出さ〻
おもしろく叙の宝を下りしに生活不可やうくんとなるく〻
宝をとりてきは附るものなるく〻　叙のり　秦穆公以象
牙為之敬王以玳瑁為之始皇金銀作鳳頭以玳瑁為脚號
曰鳳叙

おりもりもの七夕の注　杜國

宝永丙申の八月を三つ月とかるを二百四十才の寿とかるて扱八月
凡人ゆえんなるべく〻仙人ともなるべきなれども生附の表の四
白目不詳なる言ト林和靖の伝も芳不出されども不出芳の
言のを撰して叔い天人なるく〻七夕乃書を仲人する
と秋季を附る寓意伝の白なるく〻なるの附出〻いる生
此の風調なるく〻亦の一説を芳白の寿をなる生活のものと

なるく〻寿なるくいまを書定めなるく〻を七夕の比仲人して書を
近くなるくもいり此句解始の説のなるくいを亦なる〻後の説
を用る附い亦なるなるく〻句説なるなるくいを取るく〻

西南不桂のなるく〻　羽笠

芳白不七夕と秋の出るなるく〻桂の出るなるて月をなるなさり西
南不つ月出ト八七月の月なるなるく〻七夕の月い亥の八刻
西南ゆるなる

菜乃花ゆるく〻ト木なる寿　芭蕉

なるく〻今秋の附く菜油薫高ト菜の油とるるなる　陳藏
器曰蘭草生澤畔婦人和油澤頭故云蘭澤　芝い巻袴
のるく〻白さい秋の衣乃出るなるく〻衣をなるく〻新葉をなるく〻
市人の油附るなさ体なりて桂乃花のつるむとなるみト木なる

言ト指ヲさして付くるちゝんを

綾乃ゑ形よ賢ちる女ゑくゝ原　重五

此白い菜の油ゝゝに女の玄のあれいちゝ丈を賢ちると
作ゝゝゝ菜乃香のゝゝゝちゝん　秋風辞ニ蘭有秀兮菊
有芳懷佳人兮不能忘矣かゝ原ゑもゝ今て賢女ゝは
付ゝるゝ〳〵　付ゝこい芳白菜の油を絞る家い宮中ゝちゝん
ゝゝ北ゑ賢ゑ賢よ賢ちる女ありゝて家半ゑ燈乃對ゑ

約瓶ハ栗を有ゝゝ白のゝゝ指　荷兮

ゑ白い賢ゑの用を付ゝゝ栗ゝゝへき桶さゝちて約瓶よ
作ゝゝん前白の賢女ゝ手業ちゝし

ゑゝ千ゝ千ゝ指ゝ原正月ゑ　杜國

此白めゝゝゝさものを能ゝ出して付ゝゝ釜を桶ゑゝゝ

へきを約瓶ハゝゝとゑ家物の殆ゝゝちゝゝ正月よゝゝ
ゝさものをゝゝゝゝゝゝ飾ゝものいゝゝちゝあゝへき
に指ゝと作ゝるゝちゝゝ白の毒を女の業ゝゝゝ作ゝ
指ゝい子ゝゝ話孫ゝて疱瘡ゝ麻疹のゝゝちゝハ正月を
仕ゝゝて祝ゝゝゝ付ゝゝゝ正月ゝゝゝゝゝゝゝ都
鄙ゝハゝゝゝゝゝ　芋ゝ吉月祝椀をゝて豆ゝして
手をゝゝ方ゝゝ夜祭を除くゝ迚正月のゝゝゝゝ
ゝゝ

ゝゝみ手向ゝ矣ゝ　宮　野水

ゑハゝゝゝ正月ゝ新鄙ゝよあゝちゝゝゝゝゝゝ
ゝくゝ田全ゝゝゝゝゝゝ正月ゝゝゝゝゝゝゝ
安芸文の宮ハ付ゝゝん安芸の文奥のゝゝハゝゝ

一つ物とも詳ならぬ所を考へ合せて後考を待つ
包丁手向とかの解なるべし仮名にて書れたるべし
此解杜撰と数手向るとも疫癘祈の除厄のためにて仕
立て祝ふなる神をすしとなまるか神楽やうの
を云なるべし

寅のゝ月を駒迄乃急ぎ　芭蕉

此世故翁の素ぶこと知るべし一説解を出いたの駒迄
名命を蒙りて名なる歌を手へしとなんこゝろ歌を起も
ゆ私のちくゝふ及いされら勇者の為ゝふ歌詩て祈し
て名歌成就を祈ることゝ附てしんを宮の一字に歌起ん
望さなるべし

雲かうたゝき南京乃地　羽笠

此句源氏とゝるより呉の干将を名ひ来て南京の地に附
たしんを南京と呉地をゝ云ゝ
楚威王の地に王氣なるをもて金を埋て以て呉を鎮
するゆゑなを金陵と号きゝ刈今の南京なるゆ故
ゝ一白乃文字ゝ作るゝ
秦始皇以金陵有都邑之氣改曰秣陵矣

いうさして誰ともしらぬ人の像　荷兮

云い南京ゝを南京ゝ附ゝ事都の仏法興隆の
地なるゝ仏閣あまたなるゝ故翁も
第乃多や大平ゝ仏達都も中さなるゝ
ゝて見をゝ小さなる旧故なるゝ
ゝて多の詩もしなるゝ人乃係の恒ゆ迄ゝ

ちるくいとさハ瑞籠玉垣乃数と

泥くてこそのきしなれ芹の根　重五

けけんなる白の係を古渡なる落雲の乃るくてこそ人々

隠君子ふくて後宋の茂叔ゝてこそ愛蓮説を板

向くくくて泥ふてこそのはくさとハ作りてこそん芹の根に似ぎのふ

て泥ふてはくさといけんこそ乃ちるくく

粥すこそあるつきさ花ふうこそまり　野水

心のはくさこそのつこそうはくさ多孫逸の境界をこそて付こそう飯

蔬食飲水乃徒なるくくくて詩ゝ戀花林下飲愛草野

中眠こそくの凡徒をこそて作こそるくく

粥衣の下ふ涼こそのこそるふこそ　芭蕉

変ふいこそ大きこそ変化をこそふけこそ芭蕉の粥すこそるとこそふを陣中

こそて付こそう叔こそ武者ふ老多ふ徒のこそちさ多くこそん

に芭の一字のこそるこそくこそいこそ宛こそて多武者ふくて雑兵徒

武者乃勢ひふいこそくこそくこそさ仏こそ大夫敦盛叔の併をお

こそひこそて付こそくこそん粥衣の下ふ芭風涼こそふと作りこそ仏

こそこそふ大将の粥ひこそ花くくくこそひこそふ初陣こそもこそくこそ

こそこそ武道の幻術こそるくくこそ芭蕉の芭のこそうこそもこそく

こそくこそくこそこその出陣こそも勇こそくくこそて

小のうこそこそくくくこそ簑おくくこそ　羽笠

初陣をこそこそこそ仏をこそこそまこそに付こそう白こそ作こそうこそこそ仏こそ

小こそ安こそを用こそこそ

初こそ生こそ夢こそを責こそれこそもこそこそ　杜國

小のうこそこそのこそこそこそ仏こそこそて二白一こそ付こそこそ

はるをひくるま僅か十歩

つみかさねて月とともに成すしられる　杜國

はるゆくとふるに定めなきさの影うつろひもてゆくこゝの芳
書ふちうつり倒せハちるけのん安さよきしの色よりふ逃人
う白よ故等等を加くて別傳と紙を設けあるまて影系
数白の光りをこうけうしうれい前去い大切のものこん
ひりくきるのふて白言い僅よ十歩のあくもしくるうえん
言ら忽月おくるる方為世界の浮世い方すくはとと
紙表しうる大ふ盛ひり

影ふるもりしのいるはるる　重五

庭のあいちと乾るぬふタ立の雨さけきるく出る月うるれト

ちるるとくしれのいまと乾れ立の氷のうよちくくと
月乾のうるうまを色を移書よ比喩して白の餘言をく
けるを移と移書トハ言学物変の場こ但楽経日是身無常念
念不住猶如電光矢言を言を庭ハ少侍くく作るるくくしく不得
刹那生滅ら作い僅一歩のうちも生死ひり行況十歩の間と
沖誌よ侍氷を踏うてくくと

歯ふの美ふを初物人ノ矢ノ負て　野水

夜京季ちうのみして弟こと詩格よ物の場ちれい大よ変化
ちうて言学言紙表の下をさうと敬下して物人と作る
言侍ちり叶物人を氷ふくゆく移書ふ四しくるけ感恢
ふうくれ初白言い市人の初商を祝する言ふして猫ふの初物
をくくふきて歯ふの美を胡蝶ふちうけひくくの門出

も疎からぬ姿も画きつゝめし

　　水の御門を押明る音　　芭蕉

前句歯朶の葉にかざりし注連飾るとする所に眼を
つけて御所の初春の貢を附る例ある様赤の美なるを
のせしわけ花式家の守りより禁裏へ貢を奉るなる也人執事
乃役者の数多人しあるなる年中行司家合に初春の千
代の例の古実に預る役者も我君のゆゑ水の御門より水を
捧持して奥殿の御方通へする門あり侍らばなるべし亦
小家閑人の掃除して其扉押明るを作りたる一陽来復の
意なるなん

　　一ふし囃の扇子風のなびきみ　　荷兮

前句大内の古き事ならば一生ここにとかゝりはなく無きものを附て

春の掃除とありしより北の御門の水の音顕したるなん
をもふんを宰ひて掃除の体を附たるなん春のうちくるゝ容を一
句の化粧として扇ありて蕭携くといふおもしろし風乃
なりけるとい御門を通しけるなるべし

　　茶の湯者おしむ形見の一たんなて　　正平

掃除とあるより茶には数寄好を見出して茶の湯者と附
たり春の御の事しとくる事するむの事を入ちうつへきも
かならず不浄に除きてあることなるべし古人の家に去りの形見
なるゝ掛物を求し我も形見をあらしみ一夜宿ねあり

　　らうたけに物よむ娘かしつきて　　重五

此句は前句の茶人儒者の娘とみなを誘ひて形見を道くる千家
体を附たるなるべしと見えけりとまねく羅綺にもえぬを

[illegible]

原氏より[illegible]女[illegible]原氏より[illegible]

[illegible]は[illegible]傳の字し

[illegible]又原氏に[illegible]の入[illegible]の一つき玉

[illegible]

[illegible]非を好むの[illegible]

[illegible]

連[illegible]

炒竜ふるけるふる　杜國

[illegible]白の[illegible]を押出して[illegible]を付[illegible]白[illegible]

[illegible]を炒[illegible]

[illegible]男の[illegible]人[illegible]を送る体[illegible]

[illegible]男の[illegible]を送る

炒竜のもの好きの[illegible]を通す

[illegible]

[illegible]力を探りわる　芭蕉

[illegible]

[illegible]の[illegible]曲節を

[illegible]

[illegible]の[illegible]の叶[illegible]

[illegible]踊[illegible]

[illegible]の手書[illegible]炒竜の[illegible]

[illegible]

[illegible]　滋賀楽乃坊　野水

芝莊の場を附て莊の主人と吹奏れるやうすなり
その時に月人もるて〳〵秋風烈〳〵吹来るとんて
蕎麦の花をもんとて彩蕎麦彩酒と名て作り
〳〵んいを会なるべし

新月春双六寸の旅二帖〳〵　杜國

芋白さ〳〵さて茶を
附て白さい〳〵きの坊ふ作りて伝楽の二字を
双六の振ひを白りせるべし

百花賞

新月春〳〵よりて作るべきなり　荷兮

新月春〳〵よりて作るべきなり　荷兮
花い本草綱目所種二月至五月開花晨乗露采花と
作り芋白の双六寸新緑ふ宿を〳〵〳〵きれさと雅
ふ作るべし新月春〳〵よりて作るべきなり

名を〳〵べきと

芋のふるわ〳〵て雛を作り居る　野水

紅茶罪ふ〳〵〳〵を用をんて雛の衣裳をあるとしおう
衣をるふ南人称〳〵附〳〵手服一統の場をて見情あり〳〵雛作
〳〵ふ作芋の働く附〳〵〳〵〳〵〳〵乃ち中き芋屋て
浪人の住居〳〵附〳〵職人の中ふ〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵毎月ふ
月の業を人出〳〵て紅花ふ雛の〳〵り手拭あり

命婦の男〳〵り米ちんとこす　重五

芋の〳〵月の業ふ〳〵〳〵あ〳〵んふ雛を作るとなる主職の芋〳〵
〳〵ふ〳〵〳〵を陣所浪人〳〵〳〵て〳〵〳〵の命婦〳〵り助力〳〵〳〵
〳〵附〳〵〳〵附白の業〳〵〳〵ふ白雛〳〵作れ〳〵詩〳〵〳〵芋屋を

[illegible]の白として次を付るゝ乃扱ひ[illegible]
[illegible]たゝ季詞なくして白を結び[illegible]
[illegible]雑なるものゝ雑として[illegible]季詞なくとも[illegible]
白の続きをのつゝ季の部なるものゝ[illegible]季を[illegible]
て四季と付るゝ蕉門の働きゝ他門にて季詞なくして雑と
付るゝ[illegible]季を付るゝ[illegible]
ゝ[illegible]

陸奥さきく津軽の水ゆゝしく　荷兮

[illegible]津軽の一郷一郡の[illegible]を付ゝ苦白の米を禁[illegible]
[illegible]乃清酒の米ゝ扶[illegible]

佛喰ふる魚[illegible]　芭蕉

津軽の大[illegible]の大魚の岡[illegible]仏喰ふる[illegible]一
白の[illegible]江戸鮫井の仏大魚乃[illegible]出
現[illegible]の作仏[illegible]も今もゝ例[illegible]

縣[illegible]　重五

[illegible]大魚を[illegible]浦辺の[illegible]
[illegible]の花の[illegible]の作山[illegible]
花[illegible]を併して年[illegible]の[illegible]乃名を
いて[illegible]を作[illegible]
花[illegible]の名乃おり[illegible]
日向國[illegible]
[illegible]男子の称[illegible]

五形菫乃畠六反　杜國

是は其人の意をとて付る前句の行月に花を捨
ひくるものを撰者の書道ありといふとも其の里人の笑
作り九州山より出し者なれとも己が業花に多くの田畠を
も売りなくして今は僅か六反ばかりも持りけん丈さへ息く
て五形すみれのこころにて世を諷しけん

うれしくも囀る雲雀ちりし也　芭蕉

五形菫の咲揃ふ頃となりての咲なる年色を付たり

青麦の音せぬさくら月こ　野水

休まれば麦の戸の立ちしきりに星や午子にて頃を
あらく眠らせけるとも

おりまちや矢劔の橋乃たもと　杜國

尾張名古屋の橋は扶桑第一の長橋として長サ弐百八間と
し数諸の人のわたりゆくを橋乃長きと聞しらするに附たり
矢作の里は日本武尊東征時作矢奉之よりして其名
伝ふとぞ

唐土の松をよみて送りね　荷兮

前句のや郭より手に業を眠らして其下手の狂言と
見て附たり唐化ありしろし白かねの附たる唐土
千年加へ或は婚礼祝の祝ひの為ありて松千代の
寿さを祝ひして送りたるなるべし

捨し子を宗莉とけふの祝ひかん　野水

これ恩情の附く他の事をとりて送りたる松乃祝ひよ
見る夫子の身をそこひ出るなるべし白にはおのれ

くらし此謂てかりそめのことくらのにみとりて子ひとりところ
まゐらす人の謗をのかれてさらに情なくも捨ゆかりけるか今
程なくりなへる一木の松乃ありしかこそ稚きものや
今ハ行すゑいくよりつゝんと他の手に世をすてゝかくに清
けき類ひよわか子のなかりしくはかなくて成人なりぬるを
栄剪ものも延つゝんとせしなかれハ其子ハたゞしくにれのことに
しても年も十二三才なりしんをや此句作ハ志文まて此句ハいとも
子ハ埴生ふ程にありしハ君とハゆかりなかりてひとつせゝみるらん於
小町物かたりに光世まつて数ふ行くて埴竈のあるおのうへ乃
松をあらしき此ゑを添て小町を捨ゆるトいつり此あかの松と云
一字此解に便ありとゝもを思し合せてみるへきこと

三十日をきれし刀賣年　重五

此句ハ人の一秋の子をとまかりなまさ秋附つる子を捨しより
凡十二三年も経ゆかてなハ今ハ其子の我手にかりて物ゆるを
しく育てさしんかハ此刀をも持せて生きるを楽しみ
然しき中のんなるもなくきのみ程もて老の侭りともなるゝ今
身ハそらしくに老ひゆさゝさなれハりゆかし衰へたふかれて後代
乃刀さへ賣拂ふて我か命を繋ぐ謀ことになりなりしきなる乃
うへ乃ましゆくすゑとも思ひ出でゝうち聞くさゆれなかそれ
なかし三十日を過くトハ大さうしの表なれかんふれたの子を旅るの
こりをも其子斗あるゆゑとしれと思ひしき胸にかれハ元日と云
ふとこ心情限りなし

雪乃狂呉の國ふる笠めつらしや　荷兮

是ハ東坡様の侍りとして其句のさまに似てなれハ話向をと立之

て雪の降りしの宵寒と併うり呉国乃詩社人雪の真ホ赤
して詩い来まるん多くきい風人の学ホ手ホ
荷の刀を頃ホ代て袋を仕舞の支り邀迎の体を面ホ
詩よ黄金不多交不深ともそれい左ホ朋友ホ信
ちさ人間の青情をも誠めるく

襟そ言う雅う片袖をとる　芭蕉

袖い言ホ雪ホと称人ホ逝女の財と扱附い言格ホ加る袖をく
人も同雪ホの風狂人と附も白ホいたりホ手ホ逝女乃片袖
を襟ホようち袖さつおくおりちるして和ホ出ホかるる
ホも已ホみひるき曲ホの行て呉出の笠をうちるて風和
を言ホ雪ホの物好ホ言ホ呉国乃笠ハ言ホ蓑笠新鮮
笠ホ坡笠の新ホ言ホ風俗乃呉体をうくるとホ

ちさ人と移を棺ホ呑ホさん　重五

芳白ホ経ホ片袖を襟ホ千ホたりれのおりホ行ホ揚原乃大
騒さと附ホう白ホ数の頃移手ホ言ホ呑死ホさん氏
移敬千て死ホ言ホ棺ホ言て二世も之世も変ホ形ホし
と附無乃体ホ言ホ言て言ホ劉伯倫を言ホ言て謂ホ
言ホ　劉伯倫性嗜酒嘗携一壺酒使人荷鍤謂曰
死便埋我

荒子のひとり名をうれて禅　杜國

言ホ悪ホ釈教を附く一度く言ホ言ホ移を棺ホ言ホんと
言ホ人ホくのうち行ホものホ行ホ死を学ホて学ホ
喪を言ホ氣ホ言ホ言ホ死ホ定ホ性の人ホんと言ホ
一休移ホ移ホの体を附ホんん

三り月の赤い時雨く雑乃琴　芭蕉

芒伸しく白ふして茶ゑのひくくとそろうへおろすと附て渚
行を学ばせそろそろ〳〵けは白すくしくして風情をうく
はもとゝ孔をかくようふの白い却く作るとゝのそろ〳〵東を
時くの調力ひり

秋波〳〵くつて琴うくゑるもの　野水

芳白の綾を三井寺とゆそうして長堤湖を附そう却秋波水く
印をして新ふ脆弱すれい清風除来水波不真飄〻乎如遺
毋と逸くよ赤壁の拾ひをもひ出〳〵れて彼いふ客ふ洞簫
を吹うのちり拾真くよ弟ふ〳〵て行うれちゑひの逝ひふ琴や
ちく〳〵んひくちゆ〳〵と頻りふ弟ゑて忽僕をして生琴を
かくをうり手を強くとすくきふ作るも彼ふ渭を昭一統の場

をうちちゑひく作く〳〵一諸い真ふ乗して倩ゑ作るも倩ゑく寄る
叶ふいちや真ちく〳〵作ふで生ちくくとちふ例のちの寸
きこちゑゑて向ちの手脚ふして弱者の人乃ちひらくさる示
ちく〳〵んこう

意ゑ乱ちゆ〳〵てちを放ちゑ　杜國

ちい脚くのひうふ鈴を垂てりすく〳〵楽ちを逝人の作ちう
ちく示ふ白のこ味とうふ芳白ふ琴ちして倩ちゑ作ち
強くてゑれとちを性ふ附て生ふ魚も釣ふい釣ふ作ちも釣ふ
てくゑ作ちゑ吟ふんちくて生釜くすけひさすくと
放生の白ふ作て生ん示ちの人識をんきるちくく

ちゑうちゑ会仏数を見てつる　荷兮

芳白沙夏を放つとちうひ我ふの容をんちう白ちい数を

陽つるとなれいとろもは嵯峨なりの不動ある地ゆ庵をト
てこころ移りて行ひすまして居る体をおよそ実るさまと
声をさとハなるうちゆ節をとりて也のなるまてもちくこそれくと喝
形ち庵世者のさかいと殊勝と

うけうすきり惣けゆ起侘く　野水

立ゆ芋白の立仏を守る人を附ふ義を陽るといふう雲
の住位をおりゆやうやてちろ細きさんよくいひちやう鈴
すさとこゆて枝もいくこうて切懸の火のちろくとちるゆ
アこ立仏の芋の面ちにやるうの淋しさはもこりれす起侘
ちる実ろうこ

ろひるもり花の芋川　重五

立ゆり惣沙しゆをを答て立を附出ふうんを

きろひ初ゆ立の切りて立ちひ密ろゆ立ひりゆせんとちす山を
ころ半ひいとおりゆ行惣沙ゆ起ろひるうさるに芋ひ
くよ作りさんおこひうるつるさるたこれと

おうれ飛たり面花のうまゆ入　荷兮

立い立の詞をこて芋白をたりらやくんを持る附と白立い
芋ひくよるろひりゆつる立の切るうゆ立ゆ沙くてんと立像
ちちるくゆ伊勢物ろうよろひたうゆ出ゆ玉のたうる
らん板おくろくい玉持ひよ一白を除く芋白へうやてんを芋の
蔭ゆ入と物くる功名の業をんく

その年の日ををれもおろく　芭蕉

ひ白い西上人の辞世をて二白一立ゆ附行う西りの分ゆ
移りくと花のこと少て立死んとのきとこれろゆ身の位

白露は草の上におく露の落やすきを命の消やすきにたとへたるなりとかや されば上人のこゝろは其身を露とさとりて霜月の花の比 それをしきりにかなしみ給ふ風雅の人なれ ばこゝろはむかしもいまもおなじかるべし

田家眺望

霜月や鸛の彳々ならびゐて　荷兮

此句白鳥の類のさまよくいひかなへたり 鸛の霜ふりたる毛も寒く風に乱れて霜月のころよく知られたり 彳々とならびゐてといふは刈田の株のつくしたる氷田の水の鏡にうつりて ぎよくぎよくと眼に遮る其の淋しきながめなり 寂しき眺望

なし 拙此句の賞する所は鸛の雪に霜夜の田家にたゝずみて さびしきなかめのさまを田家の眺望 まことに寒きさまのうつりゆく比とくせの寂相を即今眼前の実景に寄せたる句作なるべし

冬の日のあたりをしたふさま　芭蕉

此句は鸛のたゝずみたるさまを白きに雪をもてあそぶ 其の冬の情をはなれてはたゝずむさま 余情はかぎりなし 句をとき解する時は却て其の義を失ふべきか 左傳曰趙衰冬日之日也言可愛趙盾夏日之日也言可畏 云々 かの春日の長閑なるより夏日の苦熱をおそれ秋天の凄きを感じて冬の日のあたゝかなるを愛する風情なり

ありけり

櫻梅も山家の体を専ら茶に降　重五

是は起承の二句に揚のなければ第三に至て揚をかへて附たる也
のなりけりさて木葉に散乱して常盤木をも埋むやうに
荒まさりなるさまなるべし されば山家の体と作りなすに
第三の位よく作りて平句ならば露すさまじく見ゆれ此句の句調
の遠きとなるをしるべし 第三は文字留のかはあるは論し
なければ略して句こそは 古文曰 後赤壁賦 霜露既ニ降テ木葉盡脱ス
人影在リ地ニ仰テ見明月ヲ 茶に木葉散るして月を隠すべきころの冬枯
人影鮮なる地に在るを去やしころ 仰げば月明らかなり
とて此句の形容を翻案して冬の夜の静かなる趣なる
なりけるといふに山家の体を木の葉に降とさせたるなるべし

かし

ひさげする牛の塩こぼれつゝ　杜國

此句は山家の体とみより塩を運ぶ牛と附たるさまを附たる
とらは前塩のこぼれしといふにて山中の嶮しきみちを眼前
に見せたり更なるく体なる手に茶に粉あわけるしとも
こまかなるれし行き方なるべし

音さへ痩せ見し小月の寺　羽笠

是は一騎して表のさみしに箕輪と附たり去りも表なる
揚るぬやうな表も見え見えとて陣中の静かなり
夜なるにに静て箕輪の堅固なる寄をみせて月の寺
しと静かなる体をみるべし 附くるは小條家より武田勢と
塩責にしたる体なるべし

酌とる童に菜切りのこす　野水

[illegible]

秋のうら旅の古さをいとうらん　芭蕉

芳白頭宮の無常切とゆひるさを上蹈の旅をて附
らんうら白髪司位のゆうきくんのくんも旅いさをいまるふ
のうかうちめの伺宮あもすむへきものさくうて菜をと切く
無一万いうに体をんん源氏為禅の老よ　おろし野をあ

小屋つくり茅をうゆあり仏らけようとうも見るの風情をを
宮金て旅のゆうれをとうくあやさん料よ陰叶の伺迷分故
併にをうれ秋の仏とうれ狩あうれ保うくく

閑さや岩にしみ入る蝉の声　荷兮

芳白孫の伺迷宮をうはうん寺ひうと場をく寂めて三国
を双の冥をて附る旅の不ふちくををくうらふくきをや

寂として枯の色乃落るなり　杜國

ちれん金釈の附ふして芳白郎く味てらるよ椿のを乃
落るをうして百後の新るる体を白郎ふをせうれ狩徒

磬面ふ雪く梵宇の風色ろうくく　詩よ　嵩丘蕭若
一峰晴食蹈鳴磬巣烏下行蹈空林落葉聲かうの京を
若ふ小ふ多ふれ遊ををもるの丈　重五

芳白ふ雨後の体をもめりやはいを雨ふ秋ふの立のもの風雅
天のさ名を付くるに敦茶の白ひを持をもくし

雑遊ふ烏帽子の女　五三十　野水

をと三三白やう白のつきさ作ん芳白の侍る風の寒らもつよりり
付を起して意の白ををひ寒ふ丈もるる行しの女五三十花
やうに作りてあやさの宮女ふ遊ひの趣無とをくるといと
ふをひをう

庭ふ木ふ作ふこひの落衣　羽笠

意い雑遊ト雨ふ芳白の寒さふ妻の形よりきくれの書ふ
ふもものう作ふ氣を人ふもくるる作つ寒らふふ見ひふ大
名を或い書者の別業と付ふうの庭のこの好ふ書くいふ
院の芳くをもふくして作ふ木ふる山の風系を造くせ

ふ花ふ宮の寒ふをうくし意の落花ト作ふ書の粧い
ふくん付ふこい芳白の女五三十八ふ寒ふ侍女ふくして寒ふ
の遊興ふ花寒の書過ふくきも

ふん山ふ紀山樹ふさふ月ん　荷兮

意の落花ふ作ふを雪ふ作ふ木ふ作ふト
ふ木下園を白ふて夏原さふ作ふくし山樹ふ
ト山中の紅ふして寒ひ書のふふふん

麻ふふふふ寒ふ乃集ふむ　芭蕉

山付芳白をふくん出くしふふくし先夏原さふ樹を
むいハ原山幽谷の体ふ話を山林ふ隠して幽居を楽むいふれ
風雅を遊ふる隠者ふくん山樹ふふる詞の白ひふ故人ふ
茶ふんの乃ふ作ふくに寒の集綸むト作ふ作ふ寒

さてさすがに花鳥の雪をうけ苔しの人の袖の露をそそぐ花
ゆの和ゆゆの集ゆ書紀をもとめんゆ玄ゆ山家集
峯白集の教ゆのゆゆゆゆゆる書ゆを出してゆゆゆ
はれ和ゆ名をゆゆきんゆゆい庸凡の人ゆ及ゆるゆゆゆ麻ゆの
名実ゆ妙ゆゆゆも苔白ゆゆゆゆて玉傷ゆゆゆゆゆゆゆ故ゆ乃
ゆ系ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

江ををく独楽巷と垂を拵く　重五

苔ゆ集編ゆゆゆゆ遠くゆゆ西上人近ゆゆ嘯ゆ拵の伴ゆゆゆゆ
人の嘯を伴ゆゆゆゆゆゆゆゆ花苑玉の白ゆゆく　独乗庵ゆ
いゆゆゆゆる風人をゆゆゆゆゆゆ苔の麻刈ゆゆゆ書ゆのゆく
独楽庵ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
集編ゆ人の世をゆゆ破ゆゆて安く生涯をゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

形乗庵と名ずける伴し俗言ゆふ巷多乗拵ゆゆゆゆ　赤山
岐宗鑑法印後州京庸方略演のゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

如雲外月之元眞不妄之義如不異之義也眞故一切ノ妄想ヲ離レ不異ノ故一切ノ我他彼此之差別ナシ古ヘ小住ヘ之ヲ

たゝ衣笠て　羽笠

苔白く朽ぬる衣笠をうち拂ひ

こゝに作者之小手ゝ之ゝ之ゝ之ゝ之ゝ公の咎めを蒙ると云

人ゝ之ゝ中納言卿平或い実方朝臣拾の侍を

ありひ者て旅流ら侍ゝん之ゝ笠小落ぬを打拂ひ

ゝて旅中のうさを雲上小作りゝると覚え

一白罪人の侍小きやくゝ作ゝさる小奥ゆゝゝ

蓑輿　ゆゝ本瓜乃山ゝん　野水

苔白ゝ旅侍の白ゝ之ゝ小のうに罪人のゝゝ之ゝ

之小まを押出ゝて侍ゝゝ之ゝ蓑輿い牢輿ゝゝん本瓜の

山合ゝ嶮岨乃容をゝゝ之ゝ之ゝ白ゝい人を乗て之

輿の中ひつゝくゝもゝさ終小ゝ之ゝ宮人ゝゝを乗ゝ罪人を

ゆゝめて輿ゝゝゝ之ゝ侍ゝ蓑輿ゆゝ之ゝ之ゝ作ゝ

ゝゝさは笛小ゝ笛を打拂ひゝゝ之ゝ侍ゝゝ初ゝゝ他之

用ゝゝ

蓑ゝ我ゝゝ坐小泪ゝゝゝ　芭蕉

泪もゝ他之立小て泪ゝゝゝ之ゝ侍ゝゝ之ゝ

苔白の笠蓑輿を遠流の人と定て侍ゝゝ号をゝて泪ゝ

ゝ小ゝ号小ゝ之ゝ之ゝ迂ゝゝ之ゝ侍ゝゝ之ゝ号ゝゝゝ囚人ゝ之ゝ号ゝゝゝて

屍を荒磯小晒ゝ之ゝ也ゝゝ又ゝゝゝゝゝゝん之ゝ歩ゝゝゝ侍ゝ

歩悔小ゝ　史記賈誼傳漢孝文帝二年河南守呉公

治平為天下第一以為廷尉薦洛陽人賈誼帝召以為博士時年二十一歳一年中至太中大夫於是改法於天下是故絳灌東陽侯馮敬之屬乃短之曰洛陽人年少而初学専欲擅権紛乱諸事於是天子疏之故流而為長沙王之太傅也意い洛陽の賈誼文帝のもとめをもとめふかくして屈原のむりを弔ふこころ亦少卿の連弩の芳名を送りて陽の美名付り多い山の烟の稀ふ狐るこん亦唐詩長信宮中草年々愁處生ここをもとめ合ふこころ

こゝ名の美をこゝふもの　久ん　荷兮

云ハ他の白ふりて樹下石上を栖とするこゝ天斗義の海に新たに附り茶昆所を卧とするに板の咲んこゝ食すこゝ人る美を施ふの白ふれるこゝ人ん泪くこゝ出ふこゝ

ふ芳白のひこさをこゝくしこゝ云ふい美意国所抑の伊もひこき
ふふ付白美こゝふふて付白こゝこゝ白ふこゝこゝ昔のこゝふ
こゝる余情がこゝ

泥のこゝふ尾をひこり　紀を拾ひわて　杜國

付白い荘子の故ふのをこゝひ付こゝこゝん荘子曰吾聞楚有神龜王巾笥而藏之廟堂之上此龜也寧死為留骨而貴乎寧其生而曳尾於塗中乎こゝい誰もく龜こゝふこ
こを紀こゝふこゝ伝ふこゝ芳白こ食ふ美を芳ふ
人こゝ食ん而こゝふ付て彼荘子ともふへき人こゝくこゝこゝ浅
泥ふ尾をこゝりこゝい白ふこゝこゝん拾ひわてトハ空こゝて殺すこゝりは
こゝふこゝい梵網経ふこゝこゝの生類こゝ殺すこゝ父母こゝこゝを
殺こゝこゝこゝ食こゝ我又めを殺こゝ系父母をこゝふこゝ亦已

身を教へしことば小山抔ふとらふい抔ふて手けを打つる所にて
菩薩ゝ度のかるく〜行基菩薩の名よりかるくと唱ふる
乃ち孝〜きけい又ゝとそふ母ゝとゝあり故名づる所山ふる
父母のきさう高〜紙の形

虎幸小屋迄むちのみちすり　重五

泥のゝくの急ぎかるびかうゝ高ふ一枝にて川　物の虎幸と附ける安
白の泥ゝとふ雲京典薬訳丸寿を解き虎幸を寄せるゝ作る
ちるゝ〜

ちゝにてる年の小角豆ぬれ花さき　野水

苔白水の虎幸ゝとふ早魃ゝてを付候を附ける時小思
ゝ夏日長愁民ゝふ時ゝ高ゝるゝ〜ゝ高ふ早抜田苗の辛苦を情
ゝふ虎幸ゝふ附ゝ〜ん

萱屋ちゝ〜小炭団つく白　羽笠

萱〜年釈の附ゝさけの花ゝふる片例町の拾ゝて
せゝるゝ乃ゝゝてゝゝの小屋小夏仕込ゝの炭団春ゝ附
ゝ萱〜ゝるもゝ紀白ちゝれゝも炭団つくゝふよ萱屋
ゝ〜ゝる町ゝれのゝ拾ゝ抔ゝゝ

芥子尼の小坊ゝ〜小折ゝ抔　荷兮

ゝれ伸〜白ゝ茶園ゝ〜ゝ小坊ゝゝの小ゝゝゝゝゝを附ける
小わ〜ゝの遊び抔ゝ体ゝゝ芥子尼小坊ゝ八十茶ゝ以下の
小女ゝ尼ゝゝひ小ゝゝを小俗抔ゝ関東の俗乃通語ゝ釈小
ゝ〜ゝ

おゝゝゝゝゝの〜半ゝる蓮の実　芭蕉

尼小坊ゝゝゝゝ抔ゝゝゝゝゝ

もの手あふれうりて弄ふさんとするく

[illegible]飯売の[illegible]月の前　重

芭蕉葉[illegible]寺[illegible]仕[illegible]の[illegible]を飯売乃

[illegible]作り[illegible]詩よ深林人不知明月来相

照[illegible]出[illegible]て窮[illegible]の体[illegible]

[illegible]　杜國

[illegible]孤[illegible]作て月の[illegible]

の体を風[illegible]

[illegible]

[illegible]柿[illegible]片庇　羽笠

[illegible]山[illegible]の体を作り[illegible]柿ふ[illegible]

[illegible]芭蕉[illegible]

[illegible]母の喪ふ入　野水

[illegible]起[illegible]の[illegible]芭蕉の住[illegible]を喪[illegible]

喪親者居倚廬賤者居堊室　宰我問三年之喪期已

久矣子曰夫君子之居喪食甘不甘聞樂不樂居所不

安三年之喪天下通喪也右論語取意　山濤居母喪

貧土成墳手植松柏

元政の芳乃袂を破ぬる　芭蕉

芭蕉母の喪[illegible]入[illegible]孝[illegible]の人を[illegible]て元政[illegible]

[illegible]元政い蹇乃母を[illegible]て[illegible]甲州身延山[illegible]

[illegible]孝[illegible]の人[illegible]喪ふ[illegible]居て[illegible]歌の[illegible]袂ふ破

[illegible]を[illegible]元[illegible]為の白作[illegible]松[illegible]の一

字を味ふべし

伏見市情の続きを聞　荷兮

此併書ものしるし除俳の文政の枝い後了陸れ伏ん
ものしるしの花い続のものふ歩ることの三野と云い二の表り
さしる曲節ア人くさ作を大ふ曲をりつきる附ものし

いろあるさ男猫ひとつを拾るて　杜國

云い続芭をうつとなる入相のさ刀をらくア出しうとふ
ものし自まい小家うちる伏ア本情乃民ア猫恋する女
京の夕ア化俳き拾ものし飼猫の夕アより陽ものさを拾
つものし伏ものし性ものさ男猫の宋の乃も系ふい居ものて
出ものくを涙ものくされものふ飼別ものし拾るて表ものる
ものし夕ものし拾のものし云ものふ附ものし

昔のものし十よの雪ものしをものふ　重五

猫拾ものるものふ猫を恋する人を附ものし生人い多くい婦女
数ひものさ作ものう人ものものものよ呼ものけものさ乃ものし
猫の性ものを長ものものの作ものの雪ものして余ものの体を
一句の熟句ものものものしん女ふい女ものの文拾をもものを合
せものへものしものさも

水干を秀句の聖わりやしの年　野水

此句い秀のの一紙を一芝ものものし秀句の牛徒を句ものせものん
さ作い秀句の聖ものい云ものものし砂ものふよ水干ものて
秀のの作ものの初雪ふおものし秀句を拾ものし或人の
詠ものよ此句ものものして秀句を鳴ものア作い拾句の二字い二句乃
ものものし拾ものも云い竹毋を句ものて秀句の聖ものふものて芝
ものし作ものて秀句の聖ものものし拾句ものものし冷ものい乃

どうかをぬぎたくなくなくな

解くゝし此句は紙の移火を少ちらつかせと庭燎或は庭火焼捨
の神をまつりて祈りさめの能と附らるゝ末城対ハ猿楽の考
徒なるゝ〜さはいは下若不敬をちやせんてハ作り出さるゝ
時ゝゝ此句まうゝさるゝ〜

梅の花よ宮をやかすな　杜國

爰ハ芳句の能のうつり古雅なる体を熟句として接笠ア
ゝるつゝゝん作りゝん句ゝゝ爰方の時節ハ下して供奉の
人くゝ多ゝをゝくゝも爰の時宜をゝんゝして同一出立の接笠ゝ
ゝをやつすゝるゝ〜例ゝゝ法候の奢ハ抑ハ時例役人ハ乃
古ゝの法ハやんゝして用ゝ装束ハ出立数ひ教ゝ〜

銀ア蛤か　ワん自ゝ　後　芭蕉

此句ハ文の供時と附ゝゝ銀ハ拾ゝんとゝる此詞ゝ玉ゝ上
ゝて句ゝゝ〜諸ハ地下の詞ハゝゝゝゝゝ〜元一句乃
ゝゝひゝるハ芳句のゝゝゝゝゝゝゝゝ〜
月ハ海と作りゝゝて芳月のゝゝゝゝゝゝゝ〜
色ゝの風流紙ゝ毛ハつゝ〜

ひゝゝハ移をすゝん岐阜山　野水

ゝゝハ法辺の脱地をゝて元ゝゝゝゝゝゝゝ表ゝ
ゝの此名ハ地名ゝゝゝゝゝゝゝ〜

蕉門俳諧書目錄

京三条通寺町西　菊舍太兵衛藏

七部拾遺

その七部集に洩るゝ七条を小刻にす　全二冊

鶴のあゆみ　秋山氏紀行　蓑田二子仙　一ツはし

松の実　神保　其角

四部錄

そもゝ公羽評あり〜句会の書

四集を小刻に　未刻　全二冊

田舍句合　蕉翁評注　其角発句

蛙合　蕉翁評注　門人発句

芭蕉句合　蕉翁評注　杉風発句

四季句合　蕉翁評注　春秋湖青　素堂部　蓑調和評　評冬　芭蕉評

格外弁

そもゝ公羽句会工法法あり〜格〜を後条を接華〜て論七〜書〜

一冊

三草紙　白井〜〜　赤彦撰　玉双撰
全三冊　蘭更校

芭蕉談　全二冊　肥後文曉著

冬北日注解　全二冊　浪華升六著

かけすゝ　全二冊

道乃便　古人明水の著乃反校条を刪補ち〜〜書し　全二冊

梅翁宗因發句集　全一冊　浪華　一炊菴著

世説　全五冊　蘭更選

芭蕉翁消息集　全一冊　蘭更著

去来文　全一冊

麻かゝ土　全一冊　栗津　重厚著

一夜四哥仙　樗良　蓋村　几董　嵐山　蕉村　芭蕉篇
同　續　　曉臺　青蘿　几董　月溪　蕉村　芭蕉篇　全二冊

舊門中奥　六家集　樗良　蓋村　麦水　青蘿　曉臺　蘭更　全六冊

今ようの舊門と称するは実に蕉門中興の名家なり其家と擬して六家をあつむ并伝と係とをかゝ

四季詞寄　油単子　懐中本　壹冊

四季詞寄　糸車　後の人発句自句を比較とする古人の句を自をあつむ　懐中本一冊

蓋村七部集　各板行焼失せしを小刻とせんをのく　全二冊
未刻
其雪歌　明烏　一夜四哥仙　桃李
続明烏　五車反古　花鳥篇

周文集　寿堂記序跋の類　全一冊　洛　月居輯
未刻
数寄をこのむ人の序跋をあつむ

玉藻集　霊女の句集なるべし　全二冊　洛　蓋村著

樗良集　發句　附合　文章　全三冊
樗良尾張産の人麦水の門を脱し蕉門を中興せし高家傑なり今三集と合して世に弘む

樗良拾遺　前の集小刻二冊なり　二集と延加して

百家仙　中興舊門名家百人撰あつむ　全壹冊

八仙哥　名家百人撰仙人書をあつむ　全一冊　洛　夫左著
并に係辞加ふ

若葉集　今川了俊三十六人秀逸等の俳を加ふ　全一冊　玉屑著

伊丹風流　鬼貫句選七車ホトトギス　後句をあつめし　全一冊　潮東紫英編

今風流　四季發句集　全二冊　洛　其成編

此ものゝ俳諧の妙洞を志るべき出でて四季の發句をあつめ
年々摘出して入集乃句を投じ撰んで成帙ふ

桃志ろべ　ものゝ俳諧の附合七ツ集日錄日接連ホ
ものゝ俳諧の教を行ひむ　保更車蔭輯

俳題正名　此書は四季の句にほとゝかく切字でにてしの秘伝
ものゝ俳諧　全一冊　伏見鶯喬著

俳諧新式　四季の句にほとゝかく切字でにてしの秘伝
全三冊　付合ものゝ俳諧　伏見鶯喬著

俳諧一枚起請　此書は公野門人仲六の俳諧の秘伝ふ為
ものゝ一枚起請ふ為にてものゝ　全一冊

蕉門一夜口授　蕉門俳諧の変化流行の新と門人の
問ふ為ものゝ手引　全一冊　加賀　義水

季寄手勝手　俳諧一本一冊　義水指百ゝ紙入
蕉、夏、蕉、蕉、蕉、三版つゝて　此書は季節と指るふ為ものゝ
仮名付する為ものゝ手伝百数の法あり　簡切なる為の伝と付る